色彩教材研究会通信　No.389　2024.5.9

発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

●学会メールニュース No.508 から

◆展覧会：さまざまな色覚から見た薔薇の色

「おじいちゃんの薔薇園で」色覚のたいへん良かった父の薔薇園とその思い出展。

主宰：市原恭代（日本色彩学会会員）

カラーユニバーサルデザイン機構 CUDO の協力により、色覚多様性のＰ型Ｄ型の薔薇を描いた作品 14 点も展示されます。
ぜひおでかけください。

◆日時：2024 年 5 月 16 日（木）- 5 月 20 日（月）11 時 - 19 時　（最終日 17 時まで）

◆5 月 18 日(土)17 時よりアーティストトーク「個々で異なる色覚について、どうして色は見えるのか」について市原さんが、簡単なトークをされます。
その後、ささやかながらレセプションがあります。

◆展覧会会場：ギャラリー同潤会：表参道ヒルズ脇の＜同潤会アパート再生棟 2 階＞
(表参道駅か原宿駅下車)

市原さんは三全日ほぼ会場におられます。不在のときは会場に連絡先を残してありますのでご連絡ください。

上記のおじいちゃんは永田は同じ会社に在籍したこともあり親しい友人でした。

（学会メールニュース No.508 から）

言葉凸凹　隠蔽色と威嚇色

隠蔽色と威嚇色は、共に動物の体の色や模様の配色に対して用いられる言葉である。

隠蔽色は、自己の体色を周囲の環境の色に同化させて、身を守ったり、獲物を待ち伏せしていることに気付かれないようにするためのものである。体色をある程度の範囲内で変化させる能力を持つ場合と、変化はできないが、体色に似た環境に身を置くことにより、捕食者から逃れるケースに分けられる。

カレイやヒラメが海底の砂の色や模様に同化したり、カメレオンが周囲の緑に同化するなどの例である。草や、樹木の肌や葉に体色を擬態する昆虫は多い。

虎や縞馬の縞模様も隠蔽色で、虎は獲物の目を誤魔化すために、縞馬は、林の中で天敵から身を隠すための隠蔽色である。

一方、威嚇色は、弱者が強者に体色を似せて身を守るような場合である。スズメバチの黄色と黒の縞模様に似たカミキリムシとか、体側に大きな目玉印をもつ熱帯魚などに見られる。また、威嚇色は警告色とも言われ、毒牙や毒針を持つことを誇示して、捕食者から身を守る昆虫、蜘蛛、魚、蛙、蛇などに見られる。翅に目玉模様を持つ蝶は数多く見ることができる。

（永田泰弘）

● 万葉集のなかの色 -7

韓人の　衣染むとふ　紫の
　情に染みて　思ほゆるかも
大典　麻田連陽春（巻 4-569)

つき草の　移ろひやすく　思へかも
　わが思う人の　言も告げ来ぬ
大伴の坂上家の大娘（巻 4-583)

白鳥の　飛羽山松の　待ちつつそ
　わが恋ひわたる　この月ごろを
笠女郎が大伴家持に贈れる歌（巻 4-588)

紫は万葉仮名になっており、つき草は、月草・鴨跖草とも書き、擦り染に使う露草の花びらの色で、消えやすさを示す色名であり、白は万葉仮名になり、頻繁に使われている。

松の葉に　月は移りぬ　黄葉の
　過ぐるや　君が逢はぬ　夜の多き
池辺王（巻 4 ー 623)

思はじと　言ひてしものを　朱華色の
　変ひやすき　わが心かも
大伴坂上郎女（巻 4 ー 657)

「黄葉」は「モミチバ」と読み、「紅葉」の色を指す。「朱華色」は、「朱花」とも書き、「ハネズイロ」と読み、古事記にある古い色名であるが、どんな色であったか、疑問の色として扱われている珍しい色名である。

＊講談社文庫・中西進・万葉集から（永田泰弘